

平成 25 年度雇用失業統計研究会（第 1 回）議事概要

- 1 日 時 平成 25 年 9 月 25 日（水） 16:00～18:00
- 2 場 所 総務省第 2 庁舎 6 階 特別会議室
- 3 出席者（構成員） 玄田 有史 東京大学教授[座長]
黒田 祥子 早稲田大学准教授
小杉 礼子 独立行政法人労働政策研究・研修機構特任フェロー
篠崎 武久 早稲田大学教授
藤井 宏一 厚生労働省労働市場分析官（本多構成員代理）
古川 宏之 東京都総務局統計部社会統計課長
（オブ） 久古谷 敏行 厚生労働省大臣官房統計情報部雇用・賃金福祉統計課長
（統計局） 會田統計調査部長，井上調査企画課長，河野労働力人口統計室長，
植松課長補佐，長尾課長補佐、田中課長補佐、齊藤課長補佐 ほか
（統計研修所） 山口上席研究官

4 議 題

- (1) 「従業上の地位」の調査項目の検討と方向性について
- (2) 同一企業内の雇用形態転換状況の把握の検討
- (3) 労働力調査結果による 1 年間のフローデータの分析指標の作成、提供について

5 議事の概要

(1) 「従業上の地位」の調査項目の検討と方向性について

- ・厚生労働省が実施している就業状況を調べる調査では、雇用契約期間の定めが「わからない」という選択肢は設けておらず、「あり・なし」という設計となっている。今回の就業構造基本調査の結果をみると、就業構造基本調査に設計している「なし」と「わからない」が、厚生労働省の調査の「なし」に含まれている印象。個人をベースに調査をする場合、「わからない」の選択肢は必要と思われる。
- ・働いている人は、職場での呼ばれ方は割と答えやすい。これを聞いた上で雇用契約期間を聞く就業構造基本調査の設計の方が答えやすい。労働力調査の場合は、現在、逆の設計となっているため、この点を含め検討が必要と感じる。
- ・就業構造基本調査の雇用契約期間の定めの有無の設計について、例えば、雇用契約期間の定めがあることはわかっているが、その期間がどのくらいなのかわからない人は、本来、「定めがある」の中の「その他」を選択してほしい設計と思うが、「わからない」を選択している可能性があるのではないか。
- ・労働力調査に、雇用契約期間の定めが「わからない」を入れる場合には、「定めがある」場合の「その他」の扱いをどうするかということについて、就業構造基本調査の結果を踏まえ検討が必要である。

(2) 同一企業内の雇用形態転換状況の把握の検討

- ・男性の 50 代後半から 60 代前半の雇用形態の転換が多いという結果は驚き。データの揺らぎといった可能性が大きいといった印象を受ける。労働力調査において揺らぎが出てくる状態を考えると、個人から情報を得るのは難しい。

- ・フローデータ自体は多くの情報を得られるため大変重要。ストックの場合は回答に誤りがあったとしても、平均をとるとキャンセルアウトされる利点があるが、一方、フローの場合は誤回答があると誤りが増幅してしまうという問題があるため、間違いやすい項目についてフローの情報を出す際には注意が必要。事業所を対象とした統計での把握の可能性はあるか。
- ・厚生労働省の雇用動向調査では、1か月以下の雇用期間から2か月以上の長期・無期の雇用期間に切り替えた者という項目を取っているが、呼称ベースの変動ではなく雇用期間ベースでの把握。また、労働経済動向調査では、過去1年間に正社員以外の労働者から正社員に登用した実績ある事業所の割合を把握しており、これは労働者数ベースではなく事業所割合ベースでの把握。仮に事業所側に非正規から正規への移動を細かいパターン別に回答を求めても、恐らく回収率や記入率が絶望的に悪くなる。定期的に行う調査で行うとすれば、雇用形態の転換の実績の有無、あるいは、トータルでの人数を把握するのが精一杯と思われる。
- ・同一企業内における雇用形態の転換の問題は重要性がある。これについては、まだブラックボックスだということを見ると、どう取り扱うかということを検討いただきたいと思う。

(3) 労働力調査結果による1年間のフローデータの分析指標の作成、提供について

- ・計量分析の世界ではよくなされているような、欠損値に対して補正をかけ、それを含めた形でフローを出すようなことはやった方がよいか否か。例えば、欠損値の傾向を見つけ、スコアリングのようなことを行い、それらを加えて分析するなど、欠損の扱いについて今後改善の可能性などあり得るか。
- ・1年間のフローデータについては、2時点間の変化を見ているため、変化する可能性のある項目の欠損を求めることになり、それをどう求めるかということは難しい。
- ・1年間のフローは、説明のとおり、色々な調整を行い厳密化できることが確認できたが、もう一つ、短期的なフロー（マンスリーフロー）について、情報量や利用価値についてどのようにお考えか。
- ・例えば、同一企業内の正規・非正規の変化を見るのは価値のあることと考えるが、それを基幹統計の中に入れるという話とは分けて考えた方がよい。また、そのような詳な属性分析を行うとした場合、客体数自体が小さいため、そこまでの分析はできないと考える。
- ・研究用に限定するとか、試算的な価値としては、総じて重要。

以上